

# 赤米ニュース

## 第285号

(2020年12月31日)



## 東京赤米研究会

〒186-0005 東京都国立市西 3-7-29 アゼリア国立 2-101 長沢方 (Tel.042-577-6855)

おしらせ	-----	2277
おたより	-----	2279
小学生のための赤米講座 (VI)	-----	長沢利明 2280
表紙解説：東京の祭り⑫—浅草の羽子板市 (台東区) —	-----	2283

# おしらせ

## ●再度会員登録の更新のおしらせ

前号でもお知らせしましたが、当会では例年通り、恒例の会員再登録・更新の手続きを、現在おこなっております。よろしくご協力いただければ、さいわいです。本誌『赤米ニュース』は、購読料会費というものがなくかわりに、例年1年間単位で会員の皆様に、本誌の継続配布希望の有無を、意思表示していただくことになっております。その手続きのやり方は、次の通りです。

すなわち明年1月以降も、『赤米ニュース』の配布を引き続き希望される方は、本年中にその旨を一言、本会までご連絡下さい。連絡方法は、葉書でも手紙でも電話1本でもかまいません。どうせですからその際に、今年の赤米稲の作柄状況やご感想、失敗談などのエピソードも、ついでにお知らせ願えればとも存じます。明年1月号からは、配布継続の意思表示をされた方々へのみ、本誌を継続発送させていただくこととなりますので、この手続きを怠りますと、発送が打ち切られることとなります。ぜひご注意願いたいと思います。お手数をおかけしますが、何とぞよろしくお願い申し上げます。

## ●本町南町八幡神社で第2回赤米祭

国分寺赤米プロジェクトの主催による「赤米祭」が、今年も11月21日(土)に本町南町八幡神社で盛大に開催されました。昨年に続き、今回で第2回目となります。赤米プロジェクトのメンバーら約25名が出席しましたが、今回は特別ゲストとして、Kunitachi

Breweryの斯波真幸さん、クルミド珈琲の影山知明さん、東京むさし農業協同組合の鈴木雅之さんらも出席され、豊島屋酒造さんからは新酒の差し入れもありました。午前11時から八幡神社社殿にて、「赤米奉納奉告祭」がおこなわれ、渡邊憲史宮司によって厳粛な神事がとりおこなわれました。特別な「赤米祝詞」も再び神前で奏上され、祭壇には今年収穫された赤米玄米が、神饌米として奉納されました。赤米プロジェクトでは本年、国分寺市・小金井市・青梅市などの農地から、計130kgもの赤米の収穫を達成したとのことです。神事の終了後、社務所にて直会がおこなわれ、歓談に花が咲きましたが、本町南町八幡神社の氏子総代である杉田直木氏らのご案



神前に奉納された赤米です



盛大な直会もおこなわれました



カフェ・スローの出前料理も振る舞われました



今回のお握りは赤米30%入りです

内で、境内の文化財の見学などもなされました。

### ●熊野神社で新嘗祭

国分寺市西恋ヶ窪の熊野神社では本年 11 月 23 日 (月)、恒例の新嘗祭がおこなわれました。新型コロナ・ウイルス肺炎の大流行によって、ほとんどの年間行事が自粛・中止に追い込まれる中、新嘗祭だけは例年通り挙行されることとなり、まことに喜ばしいことであったといえます。午前 11 時から拝殿にて神事がおこなわれましたが、祭主をつとめられたのは渡邊憲史宮司です。赤米関係の出席者は、国分寺赤米プロジェクト代表の坂本浩史朗さん、クルミド珈琲社長の影山知明さん、

こくぶんじ動物病院院長の大石岳人さん、法政大学講師の長沢利明さんらとなっております。神事の後、社務所大広間にて直会もおこなわれました。

### ●国分寺赤米会・赤米セミナーレの稲刈り

国分寺赤米会では本年 9 月 22 日 (木)、武蔵国分寺跡地の赤米畑にて、稲刈り作業を実施しました。約 10 名の参加により、稔った赤米稲の穂刈り作業がおこなわれましたが、稲の稔り方はいまひとつで、梅雨時の長雨や夏の猛暑といった異常気象の影響を受け、今年是不作です。なお、飛び入り参加で武蔵国分寺跡資料館学芸員の米村創さんも畑をおとずれ、市内の文化財調査の成果報告をして下さいました。さらに、東京農工大学の豊田剛巳教授らも畑を訪問され、土壌中の線虫の調査をして下さいました。なぜこの畑では不作が続くのか、連作障害の原因となる線虫が繁殖しているためではないのか、といった疑問を解決するため、精密な調査をお願いしておいたのですが、どのような結果が出されるの



今年の赤米稲の稲穂です

か、まことに楽しみです。

国分寺赤米会による稲刈りは、その後の9月29日(火)・10月12日(月)にも実施され、刈り残した稲穂の穂刈り作業がおこなわれました。10月27日(火)には籾摺り作業もおこなわれ、赤米畑の中にブルーシートを敷いて、会員総出で脱穀・殻剥き仕事に精を出しました。脱穀は稲穂を指でしごいて籾を落とすという何とも「原始的」な手仕事、籾摺りは各自が持ち寄った播り鉢とスリコギを用いての、これまた気の遠くなるような作業でしたが、人海戦術のパワーで何とかやりとげ、半日がかりで収穫されたすべての籾を玄米に仕上げることができました。11月24日(火)には畑の後片付け作業、12月1日(火)には市内の史跡めぐり見学会もおこなわれています。

一方、恋ヶ窪公民館を中心に活動が続いている赤米セミナーでは、10月23日(金)に稲刈りをおこない、公民館2階中庭に並べられたバケツ稲の稲穂を刈り取りました。異常気象による不作は、ここでも同じです。セミナーではこの後、刈り取った稲藁を用いての藁細工教室や、赤米試食会などを計画していたのですが、コロナ禍で公民館の使用が制限されており、残念ながら中止ということになってしまいました。大変残念なことだったのですが、来年は何とか実現させていきたいものです。

---

## おたより

### ●稲刈りをおこないます(富村隆子)

日増しに寒いこの頃、お健やかにお過ごしでいらっしやいましょうか。私共「赤米セ

ミナーレ」では、漸く実りの秋らしく、二十三日(金)午後二時より稲刈りを致します。種まきの時期が遅れた為か、気候のせい、あまり良い出来とは申せません。長沢先生には、もしも当日お時間が空きましたら、状態をご覧頂けないでしょうか。勝手に申し上げ、恐縮ですが、アドバイスを頂き、来年に続けられたらと願って居ります。時節柄、くれぐれも御自愛下さいませ(10/20:東京都国分寺市)。

### ●わが家は豊作(長沢利明)

今年は異常気象のせいなのか、どこでも不作という知らせが届いております。皆さん、大変よく頑張ってくださいなのに、何とも残念です。セミナーも赤米会も、出来はいまひとつと聞いています。そんな中でまことに申し訳ない気もするのですが、わが家のバケツ栽培はとても順調で、結構よい出来でした。種子島・対馬・総社・国分寺の四大赤米はもちろん、フィリピン種もブータン種も好調で、ベニロマン種に至っては、過去最高の出来ではないかと思われるほどです。やはり水を張った水田栽培方式は、異常気象の影響をあまり受けず、稲の安定した生育が期待できるということなのでしょう。北多摩の陸稲栽培農家が、毎年のように干ばつに苦しんできた理由もよくわかり、だからこそ御嶽山への雨乞い信仰がこれほどさかんにおこなわれてきたのだなあ、納得しています(12/15:東京都国立市)。

### ●今年は失敗(高橋寿子)

今年は上手に赤米を育てることが出来ず、とても残念でした。日照時間が足りない庭では、来年は耕作はあきらめますが、『赤米ニ

ース』は送って頂けたら嬉しいです。縄文時代の稲の花粉化石や、プラントオパールの写真に感動しております（12/12：東京都国分寺市）。

### ●2点の反省点（浅子湧士）

昨年、後期の地理学でお世話になりました法政大学地理学科の浅子です。いただいた種粃2種（総社・種子島）を、ベランダにてバ



浅子さん宅で穂った赤米の稲穂です



収穫された赤米稲の粃です

ケツ3基ずつで育てました。反省点としては2点。中干しのしすぎ、青虫の大繁殖が挙げられます。来年はこの2点に注意しつつ、今年以上の収穫量を目指します。来年もよろしくお願いします（12/7：東京都三鷹市）。

## 小学生のための赤米講座(V)

長沢 利明

### 3 赤米稲は大昔の稲・つづき

さらに時代がくだって、奈良時代になりますと、赤米のことを記した記録資料がたくさん見られるようになります。奈良の東大寺の正倉院のことは、みなさんもごぞんじでしょう。正倉院はいわば、奈良時代のタイムカプセルです。正倉院に保存されてきた今から1300年前の古文書を見ると、今の中部地方や近畿地方の農民たちが、たくさんの赤米を都に税として納めていたことが記されているのです。

また、奈良の都（平城京）の跡を発掘調査しますと、当時のゴミ捨て場の跡から、大量の「木簡（もっかん）」が発見されるのですけれども、「木簡」というのは、木の板に文字を記した文書で、今の荷札のようなものです（写真19）。当時の農民が、税としてさかんに赤米を都に納めていたことが、その「木簡」によく記されています。それは江戸時代の「年貢」、今でいえば税金にあたるもので、農民は赤米でそれを支払っていたのです。

### 4 国分寺市内で発見された赤米稲

大変古い時代の稲である赤米稲は、長い歴史を経て、ほとんど消え去ってしまい、日本ではもう絶滅してしまったものと思われている



写真 19 平城京の木簡



写真 20 尾崎家の畑の赤米稲

た時、西日本の3ヶ所の神社に奇跡的にそれが生き残っていたというということを、先ほど私はお話しました。3ヶ所の神社の赤米は、「三大赤米」とも呼ばれています。ところが、今から25年ほど前、何とここ東京都国分寺市内で、4番目の赤米稲が発見されたのです。この大ニュースのことは、みなさんもどこかで聞いたことがあるかも知れません。こんな東日本の片隅の、しかも首都東京の郊外に、そんな古い時代の稲が生き残っていたというのですから、これはもう本当に、奇跡どころではありません(写真20~22)。この国分寺の赤米こそが、のちに「武蔵国分寺種赤米」と名づけられることになる貴重な赤米稲だったのでした。

この国分寺の赤米稲を、自宅の陸稲畑の片隅で代々育ててきたある農家に頼んで、種子を少し分けていただき、私たちはさっそくそれを栽培してみたのですが、いろいろ興味深いことがわかってきました。まずわかったことは、この稲の驚異的な成長力です。それはまことにすごいもので、5月初めに種子をまくと一気に成長し、7月下旬にはもう花が咲いてしまうのです。たった3ヶ月で開花してしまうわけで、こんな稲を今まで私たちは見たことがありませんでした。とにかく成長が速いということなのです。

しかもこの稲は非常に背丈が高く、6月になるとぐんぐんと成長を続け、人間の背丈ほどにまで茎が伸びていきます。この私の身長は175cmですが、それを上回ることもあります。穂はまっ赤な芒(のぎ)で覆われ、毛むくじゃらで、殻をむくとまっ赤なお米が中から出てきます(写真23)。何というか、いかにもワイルドで原始的な印象の稲で、古い時代の稲の特徴をよく残し、真正正銘の古代稲



写真 21 武蔵国分寺種赤米稲



写真 22 武蔵国分寺種赤米稲の開花

といえるものなのです。みなさんも、実際に



写真 23 赤米稲の真っ赤な稲穂



写真 24 弥生時代の食卓（左下が赤米）



写真 25 「天平の宴」(奈良パークホテル)

育ててみれば、よくわかることでしょう。

この国分寺の赤米は、のちに「武蔵国分寺種」赤米と名づけられ、先ほど紹介した西日本の3ヶ所の神社の赤米とあわせて、今では「四大赤米」のひとつに数えられるようになりました。四大赤米のうちで、東日本で発見



写真 26 赤米のバケツ栽培①



写真 27 赤米のバケツ栽培②



写真 28 赤米のプランター栽培

された赤米は、「武蔵国分寺種」だけで、しかもこの赤米稲は「陸稲（りくとう）」種といって、もともと田んぼではなく、畑で育てるタイプの稲なのでした。国分寺市内には昔からほとんど田んぼがなく、稲は台地の上の畑で栽培されてきました。それが「陸稲」という

もので、「オカボ」とも呼ばれます。陸稲種の赤米稲は、四大赤米の中で唯一の存在で、「武蔵国分寺種」しかありません。その意味でもそれは大変貴重な赤米稲といえるわけなのです。

「武蔵国分寺種」はても丈夫で育てやすい稲ですので、今では日本中の小・中学校や植物園、公民館や博物館などで、広く栽培されるようになりました。ここ国分寺市内でも、長い間、栽培されることがなかったのですが、今から3年ほど前から栽培が復活し、地元の恋ヶ窪地区の公民館やエクス山の近くの畑などで、大々的に育てられるようになりました。もともとの故郷の地に、赤米稲が帰ってきたというわけなのです。たくさんの方々が、一生懸命に面倒を見てくださったので、毎年大豊作に終り、ずいぶんたくさんの赤米が収穫されるようになってきたのは、素晴らしいことだと思います。

市内で収穫された赤米は、小・中学校の給食にも用いられるようになり、「赤米給食」も実現しています。みなさんも、一昨年从去年にかけて、給食で赤米ごはんを食べたことがあるでしょう。思いだしてみてください。その赤米ごはんはおいしかったですか？。赤い色のごはんは、とてもきれいだったでしょう？。（つづく）

【表紙解説】東京の祭り⑫—浅草の羽子板市（台東区）

羽子板市は毎年12月17～18日に、浅草の浅草寺の境内で開催される露店市である。縁起物の押絵羽子板を売る専門の市で、他所には例を見ない。年内に生まれた女兒が初めて迎える正月が初正月であるが、その祝いに贈られるのが押絵羽子板であり、それを求めるための市が年内に立ったということになる。羽子板には歌舞伎の名場面などが押絵で描かれている。